

風のショータイム！（図画工作科 鑑賞）

ある日のことである。紙の切れ端を手元でなびかせて、遊んでいる児童がいた。紙がぴらぴらとなびく動きが、何とも面白いのである。

本題材では、様々な造形要素の中から「風の動き」に焦点化してみた。風は、直接目には見えず、単体では造形的なよさや美しさを語る対象になりにくい。しかし、風が身の回りのものに与える「動き」なら捉えることができる。今回は、iPadの「カメラ」アプリによってスロー撮影をし、流れゆく時間を繰り返し捉え、「動き」という切り口で造形要素にこだわる姿を目指してみた。

〇〇からのスロー撮影で、最高の風ショータイムを演出しよう！

うちわや空気入れなど、まずは手元で再現できる風から捉えることで、様々な風の動きの可能性を探っていった。



風の動きをスロー撮影することで、

- ①対象の動きを切り取る
- ②対象の動きを捉える
- ③気に入った瞬間や動きをじっくりと捉え直す

ということを、子どもたちは繰り返していた。

活動を続けているうちに、「もっと大人数で風の動きを演出したい！」「もっとダイナミックに風を起こしたい！」という声が上がった。そこで次の時間は、送風機などの大型装置も選択肢に入れて、広い部屋で活動をした。



本学級では、一日の終わりに日記を書く活動をしている。授業日の日記の中から、「風のショータイム！」のことについて書いている子供たちがいたので、いくつか紹介する。

「今日は図工のときに、きれいすぎて見とれていました。」

「風を感じて図工ができました。スズランテープをさいて飛ばすときれいだった。」

「図工で風のショータイムをしました。やり方を一つ工夫することできれいに見えました。」

「今日は、図工できれいな動画を撮影できました。色々なところをくふうして撮り、少し感動しました。」

活動を通して、子どもたちは様々な、風の動きのよさや美しさを感じていたようである。（木村仁）